

# No. 1001

## アルペンの美技

—ワールドカップスキー—

アルペン世界一を決めるワールドカップスキーの苗場大会は3月12日から3日間新潟県苗場スキー場で開かれました。

男子大回転では総合3連勝を目指すグスタボ・トエニ（イタリア）が旗門不通過で失格するという大番狂わせ。ノルウェーのエース、エリク・オーケルが1回目のトップを守って優勝しました。

男子回転は難コースだったため、出場者の半数以上が失格する波乱のレースとなりましたがジャン・ノエル・オジュール（フランス）が1分50秒34で優勝。日本の柏木正義はワールドカップ史上、初の日本選手入賞を果たしました。なお通算順位では男子はトエニが首位。女子はアンネマリー・ブレル（オーストリア）が総合3連勝を決め断然トップに立っています。

## 終りなきたたかい

—水俣病裁判判決—

3月19日、原告の患者と自主交渉派の患者、家族は、合同で明日の判決にむけて抗議集会を開いた。患者発見以来17年を経過した水俣病の歴史の中ではじめてチッソの企業責任が裁かれる。苦しみながら死んでいった63人。生れだ時から生けるしかばねの生活を送る多くの胎児性水俣病患者、そしてまだまだ拡がろうとする認定患者。実に34年間も水俣湾に流された工場排水の果てが見せつけたものはまさに人間の歴史の終末であった長い苦しみと絶望に耐えて、患者は裁判に訴え、今3年と9カ月の審理を終え判決を迎えようとしている。

3月20日、患者は亡き肉親の遺影を胸に熊本地方裁判所の門をくぐり、法廷に入る。どの顔も、怒りや、悲しみをこらえ、裁判長の判決を待つ。勝訴とわかっている、その内容がはるかに大きな問題なんだと口々に訴えてきた原告患者。金をもらっても、使おうと思わない。親の体を切って使うのと同じだ。板みたいになって死んでいった親、絶対責任をとってもらおう。そこでは企業の社会的責任が明らかにされる事なしには補償金が認められても意味がない。判決が裁判所前の患者や家族に報告された。勝訴、これまでのようにバンバイ、の声が患者・家族の中から湧き上がらない。緊張した表情の中に、これからの闘いの意志が盛りあがる。口々に東京本社へ行こう、と交わし合う。原告患者は今、自主交渉派と一体になって東京での直接交渉に期待をかける。東京本社のテント前でも、自主交渉派の四人の患者と、支援団体は勝訴のラジオに耳を傾けていた。直ちに執行吏が本社内に向かう。入口は、未だ鉄格子がはめられたままだ。裁判は追いつめられた患者がやっとはいあがった場であった。そして長い闘いの末に迎えた勝訴。しかし、元には戻らない体、命、青春、それらの一切の怨念は今、二派の合同による会社側との直接交渉にぶつけられようとしている。3月20日夜熊本駅構内では、上京の患者家族が支援の人々に送られて列車に乗り込む。

患者は22日から予定されているチッソとの直接交渉に思いをはせる。自らの復権の場をそこにみて。